

# 日本製品 フアイル

しばらく輸入の途絶えていたイギリスの名門ブランド、ハーベスのスピーカーが日本に再導入されている。コンシューマー用にせよスタジオモニターにせよ、イギリス国营放送BBCモニターの技術的流れを色濃く受け継ぐハーベスのスピーカーの現在におけるサウンドは、時代に沿ったモダナイズのなされたものなのだろうか。それとも……。



当日は輸入元のエムプラスコンセプト(☎045-845-7639)の笹本氏の解説付きで取材を進めた

■TEXT=鈴木裕  
少なくとも20年ほどラジオ業界にて、知り合いのミュージシャンのレコーディングスタジオにもいろいろ顔をだし、(笑はあまり言っていないけど)

## 放送局用モニターで培った 技術を生かし続けるハーベス

ひそかにレコーディング・ディレクターの経験もある僕が知っている限り、日本のスタジオのモニターシステムには「基準」がないように感じている。周波数特性とか帯域ごとの音色感とか。しかもオーディオ的に言ってしまうとレベルの低い音が多い。ある貸しスタジオで音の悪い、f特がかなり偏っていると感じられるモニタースピーカーを導入したところがあった、あんまりなのでその選定理由を聞いたんだけど、「安い」「壊れない」

「アフターサービスがいい」だった。これだもの現状は。ま、一部だと思えますけど。

ハーベスの、今回紹介する3機種タイプのスピーカーを試聴室で聴きながら、僕はそんなことを考えていた。

### BBCモニターとは

ハーベスはBBCモニター直系のイギリスのスピーカーメーカーだ。しばらく輸入が途絶えていたし、若い人が読んで

file.008  
**Harbeth**  
**HL-P3ES-2**  
**HL Compact 7ES-2**  
**Mastering Monitor30**  
Speaker System



いることも考えてちょっと説明しておく。  
イギリスの国营放送局、BBC。ここで使われるモニタースピーカーは色づけのないナチュラルな音質、ローレベルでのディテール感など、いくつかの基準を満たさないと採用されなかった。また用途によってそれは2つに分けられて来た。オーケストラ音楽などのチェックもできるメインモニターの役割を果たす「グレード1」（LS5/12Aなど）。ナレーションなどのチェック用の「グレード2」（LS3/5Aなど）。さすがBBCと言いたいところだが、現在はこの

基準はなくなつたそうだ。しかしともかくこういふ基準が連続と続いてきて、BBCモニターという言葉が生まれたわけだ。  
このBBCの研究所のエンジニアであったタッドリー・ハーウッドが作ったモニターがハーベスだ。ちなみにBBCの研究場出身の人が作ったスピーカーメーカーは、他にもKEF、ロジャース、スベンドール、セレッションなどがある。10年くらい前にこのあたりのメーカーのグレード1のスピーカーを聴き比べたことがあるが、たしかにバランスは基本的に統一され、音色感も似ていた。もちろん



**HL-P3ES-2**  
¥198,000pair

エンクロージャの構造は、フロントバッフルとリアを厚く固く作り、サイドを適度に鳴らし、天板と底板を薄くして音を上下に抜く、という考え方。これは他のハーベスのスピーカーにも共通している。中・低域用ユニット（ミッドウーファー）はカスタムメイドの11cm径で、ポリプロピレン系の振動板を持つ。トゥイーターは19mmのアルミ・ハードドーム。仕上げはチェリー。このサイズで密閉型は珍しい。端子は端子型。



**Specifications**

●型式：2ウェイ密閉型(防磁) ●使用ユニット：[W]11cm[T]19mm ●周波数特性：75Hz~20kHz(±3dB) ●クロスオーバー周波数：3.2kHz(18dB/oct) ●出力音圧レベル：83dB/W/m ●インピーダンス：6Ω ●大きさ：188W×305H×198Dmm ●重さ：5.9kg

●**3つのハーベスを聴く**

今回、3種類を聴いた。コンシューマー用2機種、スタジオモニター用がひとつ。3機種ともに共通する技術があるので、まずそれを紹介しておく。  
肉声や音楽の基音があるのは300Hzから3kHzで、それを再生するのはミッドウーファーだ。その自社製コーン(振動板)の作り方に特徴がある。ポリプロピレン系の素材にアルミを配合し、しかも中心からエッジ付近にかけてその配分を変えろという手法を使っている。



「上下に音を抜く」というキャビネット構造。これを妨げないよう、底板を浮かすセッティングしてみたが、なるほどこちらの方が良好な結果が出た

これによって分割振動などの、コーン表面に発生する問題を低減しているという。また、コーンのすり鉢の角度や周辺に行くにつれ広がっていく形状なども熟成を重ねて最適化されている。

もうひとつの技術はエンクロージャの作り方だ。フロントのバッフル面とリアの背面。この2面を硬度の高い素材の鳴らしにくいものし、逆に左右側面は響きをコントロールしながら積極的に鳴らす。そして天板と底板からは音を抜くという考え方によって、全体の音色を整えているという。したがって設置する時は、底板をべったりとスタンドの上面に付けるのではなく、何らかのインシュレーターを使って浮かせた状態が基本。その上でインシュレーターの素材によって音質をコントロールできることを試聴でも確認している。

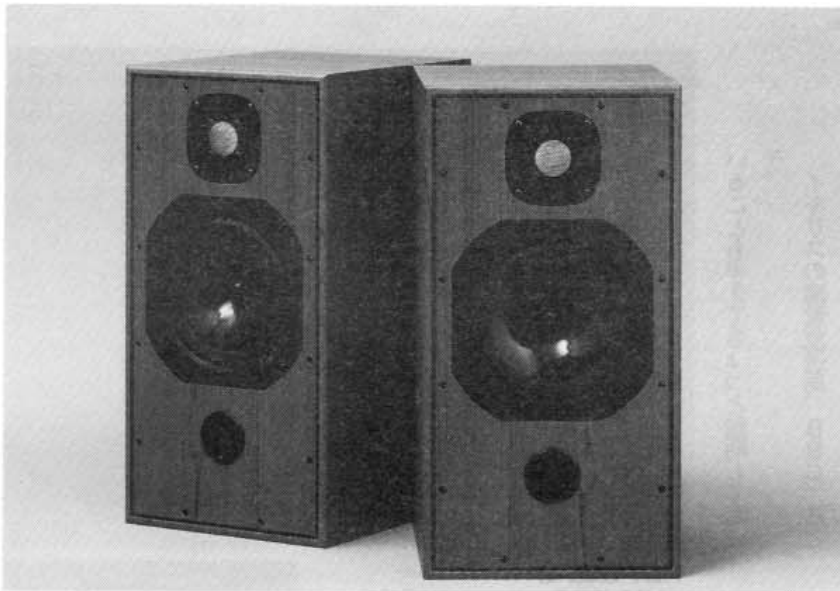
**HL-P3ES-2**

**HLコンパクト7ES-2**

まずコンシューマー用のふたつを聴いた。

HL-P3ES-2は11cmのミッドウーファーを持つ2ウェイ。

すこしだけ華やかな高域をもっている。たとえば諏訪内晶子のソロ・バイオリンのE線の音もフライトでプリリアント。瀟洒な表現だ。低域のレンジには限りがあるが、重さを感じさせてくれるし分解能もけっこうある。サイズを越えた



**HL Compact 7ES-2**  
**¥145,000(1本)**

1987年に発売されてベストセラーとなったHL Compactの流れを汲む最新作。ミッドウーファの振動板は自社開発のRADIALコーンと呼ばれるもので、ポリプロピレンにアルミニウムを配合したカーブドコーン。これによってより自然なレスポンスと正確なピストンモーションが得られるという。エッジも特徴的な逆エッジ。トゥイーターはアルミ・ハードドームの25mm径。エンクロージャは他の製品同様に、部材によって高度や厚みを変化させ、振動を押さえつけて殺すのではなく、適度に鳴らしながらコントロールしてダンピングする、という考え方。仕上げはチークだ。

**Specifications**

●型式：2ウェイ・バスレフ型 ●使用ユニット：[W]20cm[T]25mm ●周波数特性：48Hz~20kHz(±3dB) ●クロスオーバー周波数：3kHz(18dB/oct) ●出力音圧レベル：86dB/W/m ●インピーダンス：8Ω ●大きさ：271W×520H×315Dmm ●重さ：12.5kg

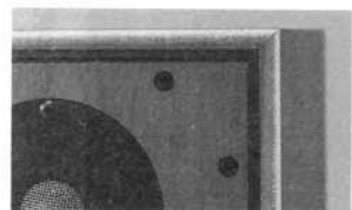


低音、という言い方があるが単に量とレンジが出ていただけでなく、低音ことの質感を描きだせるあたり、技術力を感ずるところだ。最初、底板をスタンドにつけた状態で聴きはじめてのだが、この辺りの表現力がスポイルされてしまうのでハーベスを鳴らす方は注意されたい。アルミドームのトゥイーターはSEAS社に依頼したカスタムメイドで、このメーカーの音も感じるがそれをうまくコン

トロールできている。ネットをつけても高域の損失はなく高音のフワッと漂うようなニュアンスが出てきた。これは好みの範疇だろう。HLコンパクト7ES-2は1987年のHLコンパクトというヒット作からの流れにあるやや大型の2ウェイ。20cmのミッドウーファを持っていて、HL P3ES-2からセッティングしなおして聴き出すとさすがに重心のぐ

マイケル・ブレックカーのリーダー作『ザ・バラード・ブック』を聴くと、シバルのねいろが魅力的だ。トゥイーターは3"の19mmのものから、グでは25mmになっていることもあるのだが、低音との関係も大事な気がする。低音にはこのアルバム特有の、高級ホテルのソファに埋まっているようなどっぶりとした快感があった。クラブトンやB・B・キングといった男性の音が魅力的なのも特筆しておきたい。ミッドウーファのすり鉢の傾斜の角度などにより、人の声のポイントになる1000Hzから1500Hzあたりにピークを出して音作りをしているそう。もちろんそれは作爲的

っと下がった、しかも低域の押し出しのずいぶんいい音だ。同じオーケストラを聴いていてもホールの容積が大きくなり、その広い音場に楽器の音が広がっていく様が気持ちいい。ホールの高さも感じられる。



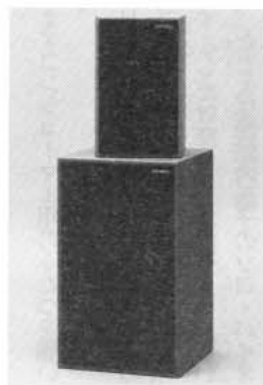
フロントバツフル外側の隙間にグリルの端を埋め込み、エンクロージャとの一体化を図る構造



素材は、ジャージのグリスを想定しよう。当り強固に固さはない。脱では結果した

マスターリング・モニター30。その名もマスターリング・モニター30。狭義に解釈するならば、レコーディングした素材をCD化する時にその音圧の設定や曲ごとの音質的なばらつきを補正し、製品化する最後の段階の音決めをするのがマスターリングという作業だ。ただ、たぶんこのスピーカーの名前の場合、放送局が送り出す番組の最終チェックとして、声自体の音質やBGMとのバランスを見る役割ではないかと考えられる。BBCモニターだったLS5/9のリリース・モデル、つまり同じ外形寸法を

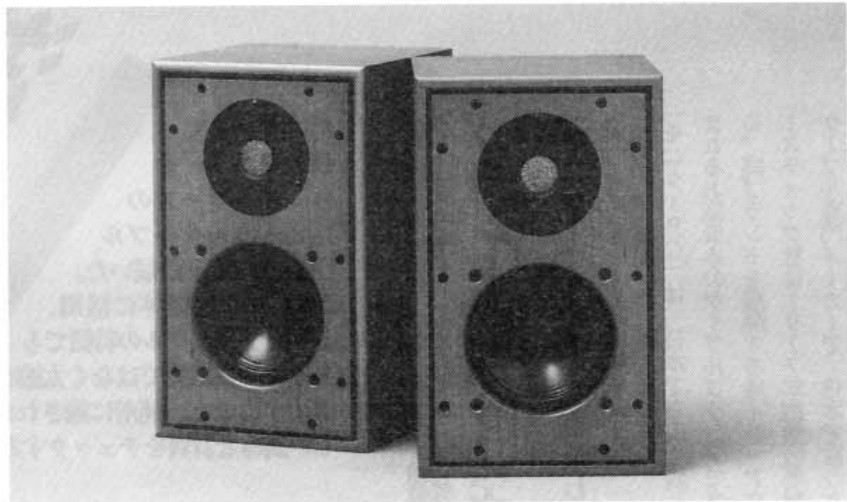
に感じられず単に魅力的ということなのだけでも。3"グの両者に共通して、バランスに偏りがなくレベルの高い解像度を持ちながら聴いているうちにほととできるような音を持っているところが素晴らしいと思った。



ネットを付けた姿は愛想のない、いかにも英国モニターというイメージだ

持ち、たとえ壁に埋め込まれて設置されていてもそのまま入れ換えられるものとして開発されている。

プロがスタジオでどんな音を聴いているか。小さな音の汚れも聴き逃すまいと、キリキリとしたひたすら分解能の高い音、というように思っている方がいるかもしれない。たしかにレコーディングとして楽器の音をひとつひとつ録っていく時と、それをミックスダウンする時では



**Mastereing Monitor30 ¥200,000(1本)**

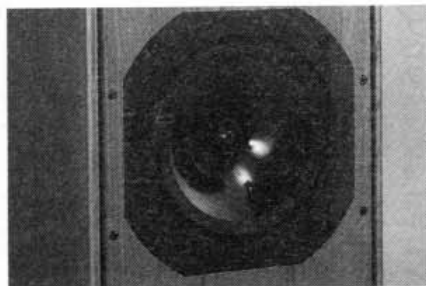
BBCモニターLS5/9のリプレイス（置き換え）モニターとして開発された。つまり、スタジオなどで今まで使っていたLS5/9（この型は、規格自体がなくなっているために、今は存在しない）を交換しようという場合に、全く同じ寸法でそこに収まるというもの。ミッドウーファーは20cmの自社開発RADIALコーン。トゥイーターはSEASに作らせたカスタムメイドの高耐久力ソフトドーム。モニターとはいえ、エンクロージャの構築法は前述2モデルと同様で、薄い木材をタール系の素材や複合木材によってダンピングするというコンセプト。こうやって文章にすると“3”や“7”というコンシューマーモデルとそう変わらないのに、音調は全く異なるニターの音になっているのは見事としか言いようがない。仕上げはグレーの塗装となる。

**Specifications**

●型式：2ウェイ・バスレフ型 ●使用ユニット：[W]20cm[T]Sonotexソフドーム ●周波数特性：50Hz~20kHz(±3dB) ●クロスオーバー周波数：2.8kHz(18dB/oct) ●出力音圧レベル：85dB/W/m ●インピーダンス：8Ω ●大きさ：279W×460H×277Dmm ●重さ：12kg



違つし、マスタリング作業ではまた別の要素が求められる。しかし、現在ひとつの流れとしてあるのは、あえてハーベスの輸入元、エムプラスコンセプトの資料から引用すれば「マスタリングモニターに要求されるのは、高い再現精度以上に、長時間のモニタリングでも聴き疲れのしないナチュラルな音質」ということになる。そう、クルマでたとえるならばスピーカーというよりもセダンなのだ。箱



HL Compact7ES-2とMasteringMonitor30のウーファー（ミッドウーファー）の振動板はRADIALと呼ばれるアルミニウム配合のポリプロピレン素材

根のワインディングへの往復だったらロータス・エリーゼがいいが、九州まで移動するにはジャガーのXJシリーズを選ぶというわけである。局のミキサーだったら8時間近く、レコーディングスタジオでは15時間ほどでもミキサー卓の前に座ってやる作業だ。中にはキリキリ大音量派もいるが。

30”の音。最初、かなり鳴りにくいスピーカーだと思つた。たぶんネットワークが重いのだ。インピーダンスや周波数特性を厳密に補正してあるんだと思う。鳴らし出して20分をすぎたくらいから目覚めてきたようだ。

堂々とした音だ。もつと大きなウーファー、たとえは38cmのモニターを聴いているような感覚がある。もちろんf特や、それぞれの帯域でのねいろは統一されている。このあたりのフラットさは、コンシューマーモデルより上だ。音色感若干渋めに感じられる。簡単に言えば、音



60cmの高さのアコースティックリバيبのスピーカースタンドを使用した。椅子に座ると少し低い印象だったので、さらにブロックで20cmほど上げて聴いた

楽に薄化粧をするコンシューマー用と、スツピンのプロ用といったところか。モニターとしてきちんとしたモノサシになりながら、ほつとできる音という点では30”もハーベスの音だった。

**変わってないじゃん。**

技術力が高く、熟成されたい音をもつたスピーカーメーカー。これが3機種を聴いた現在のハーベスのイメージだ。なんだ、10年前と変わってないじゃん。つてすこいことなんだけど。

ブラズマテレビとか液晶画面でハイビジョンの映像を見ていると、僕は落ちつかない。それは技術力を誇示するような映像で、人間の生理には合わないような気がする。SACDやDVDオーディオが生まれたこの10年でも、方向性を変えなかつたハーベス。僕が言うのもなんですがよくわかつていらしゃる。こういうのを見識と言っんですね。